

【一般財団法人日本産業科学研究所 令和3年度研究助成報告書】

研究テーマ：子ども虐待（マルトリートメント）予防のための多職種連携によるオンラインによる養育者の表情認知システム開発

研究代表者：福井大学子どものこころの発達研究センター 友田明美

<背景>

子どもへの虐待は心と脳に生涯消えない傷跡を刻み、成人後も多数の精神疾患の罹患率増・重篤化、自殺率増による苦痛を与える事から、虐待予防に加え、被虐待児への早期介入・支援が強く望まれている。子ども虐待防止には、養育者が子どもを虐待する危機的状況になる前に、養育者が抱える健康・育児・生活経済・家族等のリスクを早期に把握し支援する予防対策が重要である。

一方、新型コロナの蔓延に伴い全国各地で生じた外出自粛による「巣ごもり生活」は、子どもへの叱責等、感情にまかせて子どもへ悪態をつくというような子ども虐待が感染拡大前と比較し、10～20%増えるという副産物をもたらした（厚生労働省、令和2年速報値）。また、ソーシャルディスタンスは、家の中の私空間と家の外の公空間を隔ててしまい、ストレスやうつ症状を抱えた親子が公空間から隔絶されて長時間過ごす事により、更にストレスを増幅し、子育てに本研究では、医師・心理士・医療ソーシャルワーカー等の多職種連携により、それぞれの専門性を生かした子育て支援を可能とする「オンラインによるマルトリートメント（虐待・ネグレクトなど不適切な養育）予防モデル」を構築するための研究開発を行う。

1. 患児及び養育者に対するリモート心理支援システムの開発

福井大学医学部附属病院子どものこころ診療部、及び共同研究機関（平谷こども発達クリニック）を受診した発達障害や不安障害等の子ども・養育者 90 ペア（計 180 名）と子どもの担任教師 30 名の計 210 名を対象とした。

こころと行動の問題をもつ子どもとその養育者を対象とした 4 つのプログラム①ソーシャルスキル・トレーニング（SST）、②親子相互交流療法（PCIT）、③ボーイズタウン・コムセンスペアレンティンク®（CSP）、④ペアレント・トレーニング（PT）をオンライン化し、いずれかに参加した子どもと養育者に実施前・実施後・フォローアップ時点で質問紙を用いて評価した。

介入方法：以下、4つの介入法について対象者年齢、適応、本人・家族の希望により選択する（図1）。

① ソーシャルスキル・トレーニング（SST）

対象：自閉スペクトラム症の診断を受けた小学生・その養育者

内容：（子ども） 友達との関わり方のコツを学ぶ

（養育者） // をシェア

② 親子相互交流療法（PCIT）

対象：0～12歳の子どもとその養育者

内容：子どもと養育者の交流を担当者がリアルタイムで観察し、担当者の助言によって養育者が子どもの指導法（ペアレンティング）を学ぶ

③ ボーイズタウン・コモンセンスペアレンティング[®]（CSP）

対象：概ね2～18歳の子どもをもつ養育者

内容：ビデオ学習・ロールプレイを通じて養育者が子どもの指導法（ペアレンティング）を学ぶ

④ ペアレント・トレーニング（PT）

対象：発達障害の診断を受けた概ね3～18歳の子どもをもつ養育者

内容：講義・ロールプレイ・ホームワークを通じて養育者が子どもへの関わり方を学ぶ

主要評価項目（Primary endpoint）：

プログラム前後及び3ヶ月後以下を実施する

- 親の養育行動と心理的機能の向上(育児ストレスインデックス短縮版; Abidin 1995)
- 子どもの行動チェックリスト(CBCL： Achenbach et al.2000)

進捗状況：

2021年9月8日に福井大学医学系研究倫理審査の承認（承認番号20210082号「子どもと養育者を対象としたオンライン心理支援の予備的調査研究」）を受け、本格的に研究を開始した。いずれのプログラムもリクルート及び支援が概ね順調に実施された（図2）。

SSTは、1期（2021年11月～2022年1月）に小学1～2年生グループ4名で実施した（図3, 4）。SSTに参加した子ども達にヒアリングを行ったところ、「みんなと友達になれて良かった」、「またみんなと会いたい」と参加者全員が答え、オンラインのみの交流ではあるが仲間意識を感じる体験であったことが推測される。また、養育者からも「最後まで話を聞いてから自分の発言をするようになった」とプログラムの効果が語られた。今後、プログラム終了

3ヶ月後を目安に、フォローアップとして「同窓会」の実施を検討している。現在、2期として小学3～4年生グループへのプログラムを実施中である。

PCITは、1名を対象に2021年11月より開始し、計20回のセッションで2022年4月に終了した。

CSPは、1期(2021年9月～12月)1名、2期(12月～2月)5名を対象にプログラムを実施した。受講者より「子どもの問題行動が減り、怒る事も減りました」、「体育の日は、嫌がって休みたい…と伏せていましたが、一番嫌いな長距離走も最下位で恥ずかしかったらしいですが、先生や友達から応援して頂いて何とか走り切ったそうです。どうせ僕なんかやっても…と直ぐに諦めていたのに本当に驚きました。少しずつですが、生活も落ち着き癇癪を起こして暴れたり発狂したりと不安定だった息子が穏やかになってくれたおかげで私達も安堵しております」というプログラムの効果を実感する声が届いている。また、研究参加者のリクルートを担当する本学子どものこころ診療部医師・心理士・看護師等を対象に、講師による勉強会も実施した。今後は、養育者のライフスタイルによる要望に合わせ、3期・4期は平日、及び土曜開催の2コースを開催した。

PTは、発達障害の子どもを育てる保護者を対象としている。第I期(2021年10月～2022年1月)は保育園年長～中学校1年生の保護者(計10名)が参加し、子どもの年齢を考慮し3グループに分けて実施した(図5, 6)。実施時間は平日の昼、土曜日の夜開催とした。参加後「他の保護者さんの子どもの困りごとを聞くと同じ思いだった」「ほめることで、子どもが自分で行動するようになってきた」「子どものこだわり行動で困っていたがあきらめていた。対応を変えると直ぐに改善された」などのプログラムの効果を実感する感想を得た。現在、第II期を開催した(2022年1月～4月)。参加者は10名で、第I期と同様に子どもの年齢によりグループを分け、昼間と夜間に開催した。

これまでのところ、各プログラムは順調に実施され、その効果を実感する声が挙がっている。一方で、「私は子どもの頃に褒められたり、認めてもらう事ありませんでした。甘やかすのではなく、正しく褒める事がこんなに難しいとは思いませんでした。間違った子育てのせいで、子どもを傷つけ追い詰めてしまった事は、深く反省し後悔しています。遅いかかもしれませんが、少しでも子どもが生きやすく心穏やかに過ごせる様に努めたいと思います」という感想も寄せられた。養育者自身も辛い生育歴を抱えているケースも多く、グループ支援を受ける事が難しい心身の状態である養育者も見られた。そのようなケースには個別のペアレント・トレーニングでの対応等も行なっている。今後も引き続き本研究を継続し、対象者にとってどのプログラムがより適しているのかという視点も含め、オンライン心理支援の有効性を検討していきたい。

2. 養育者の表情認知システムアプリ開発

子ども虐待は、親または保護者による子どもへの虐待とネグレクトの両方を含む (Proctor & Dubowitz, 2014)。これまでの我々の研究では、ポジティブな表情をどれだけ早く検出するかに関して、子どもへの身体的虐待リスクが低い母親と高い母親の違いを特定することを試みてきた (Shimada et al., 2019)。

特に、子育て中の親たちが自分のストレス状態をセルフモニタリングできるような仕組みが作れないか？という課題に取り組み、アプリ開発を行った (図 7, 8)。詳細は以下の通りである。

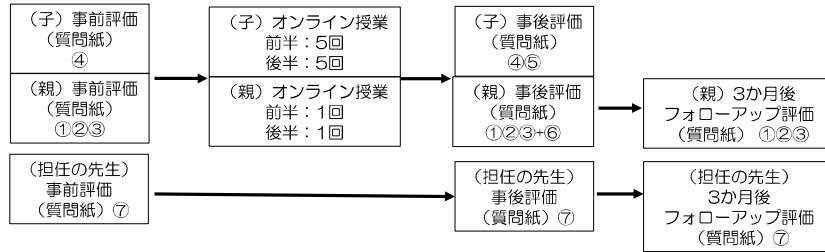
- ① 表情認知を測る実験課題の実験 (パソコンやタブレット、スマートフォン等の画面上に、たくさんの顔のアイコンが並んでいる。
- ② 「ふつう」の表情の中に一つだけ隠れている「快」の表情、あるいは「不快」の表情を探し出せ、という課題が与えられる (「快」の表情があればイエスのボタン、一つもなければノーのボタンを押す)。就学前の子どもをもつ 52 人の女性を対象に、事前に問診表による調査を行ない、子どもを叩くなどのリスク有りと判断されたグループと、そうではないグループとで結果を比べた。
- ③ 結果は、「不快」の表情を選ぶ時間にあまり差はなかったが、「快」の表情を選ぶときには、リスク有のグループは平均して約 2 倍の時間がかかっていた。この結果から、「快」の表情への気づきが困難→子どもが愛情を示しても気づきにくい→子どもが機嫌を損ねるなど不快な表情に気づく機会が相対的に増える→子育てストレスが高くなりマルトリのリスクも高まる……」という仮説が考えられた。以上から、養育者に本アプリを活用してもらい、子ども虐待予防に繋がたいと考えている。

この仮説をもとに、親への支援を行なうことで「快」の表情を読み取る能力が変化するかなどの実証実験を行なった。これまで、16 名 (40 歳 [± 3.0]) の母が本アプリを事前に使用し、そのうち 14 名がストレススコアが高い High リスク群 (スコア 26-50)、2 名がストレススコアが低い Low リスク群 (スコア 10-25) とカテゴリで分けられた。また、被験者 (子どもとその母親) に対してソーシャルスキル・トレーニング (SST) を実施、その前後での「快」の表情を読み取る能力の介入前後の変化を評価したところ、「12 個の顔の中からポジティブ顔を選ぶ課題」で介入後の有意な改善を認めた ($p < 0.05$) (図 9)。

今後も、本アプリを活用した養育者の表情認知システムを確立し、引き続き養育者支援に貢献していく所存である。

各プログラムのスケジュール

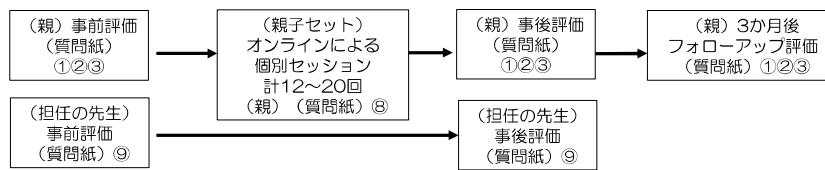
<ソーシャルスキル・トレーニング>



【本研究に共通の質問紙】
 ①育児へのストレスについての質問紙
 ②子どもの問題行動についての質問紙
 ③本研究独自アンケート（プロフィールやオンライン化に伴う感想など）

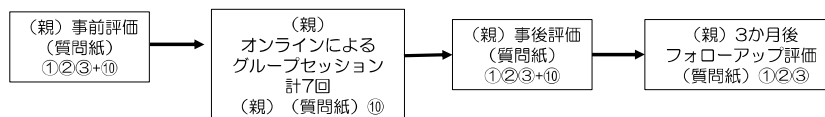
【ソーシャルスキル・トレーニングに既定されている質問紙】
 ④友だち関係と自分についての質問紙
 ⑤プログラムを受けた感想（インタビュー）
 ⑥プログラムを受けた感想（質問紙）
 ⑦人との関わり方についての質問紙

<親子相互交流療法>



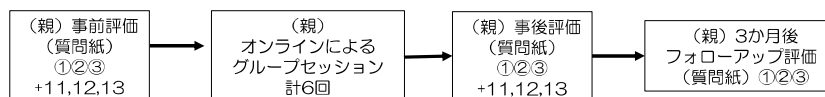
【親子相互交流療法に既定されている質問紙】
 ⑧子の行動の問題と親の育児困難感について
 ⑨園・学校での子どもの行動上の問題

<ボイスタウン・コモンセンスペアレンティング®>



【コモンセンス・ペアレンティング® に既定されている質問紙】
 ⑩独自アンケート

<ペアレント・トレーニング>

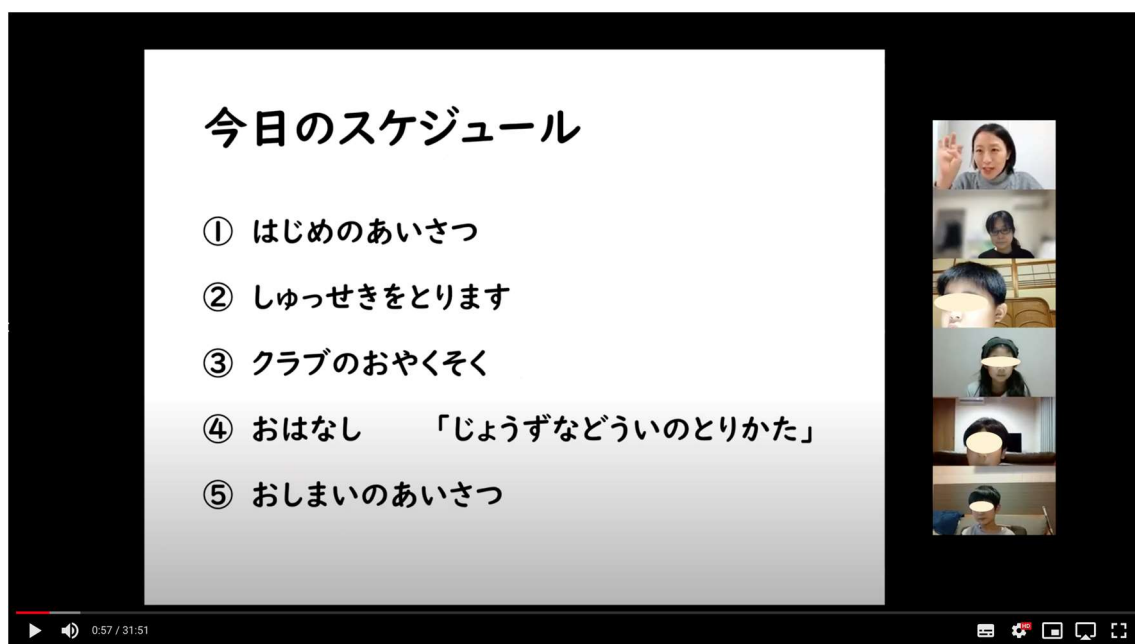


【ペアレント・トレーニングに既定されている質問紙】
 11.子どもへの対応についての家族の自信度
 12.心の健康状態
 13.子どもの適応状態（面談にて聞き取り）

(図1) 各プログラムのスケジュール

The figure displays four distinct program brochures. The first, 'わくわくチャレンジクラブ on the Web', details a 10-session online social skills program for children and parents. The second, 'ペアレント トレーニング参加募集', is a recruitment notice for a 6-session parent training program. The third, 'コモンセンスペアレンティング', promotes a 7-session common sense parenting program. The fourth, '親子相互交流療法', describes a 12-20 session parent-child interaction therapy program. Each brochure includes contact information, session details, and a QR code for registration.

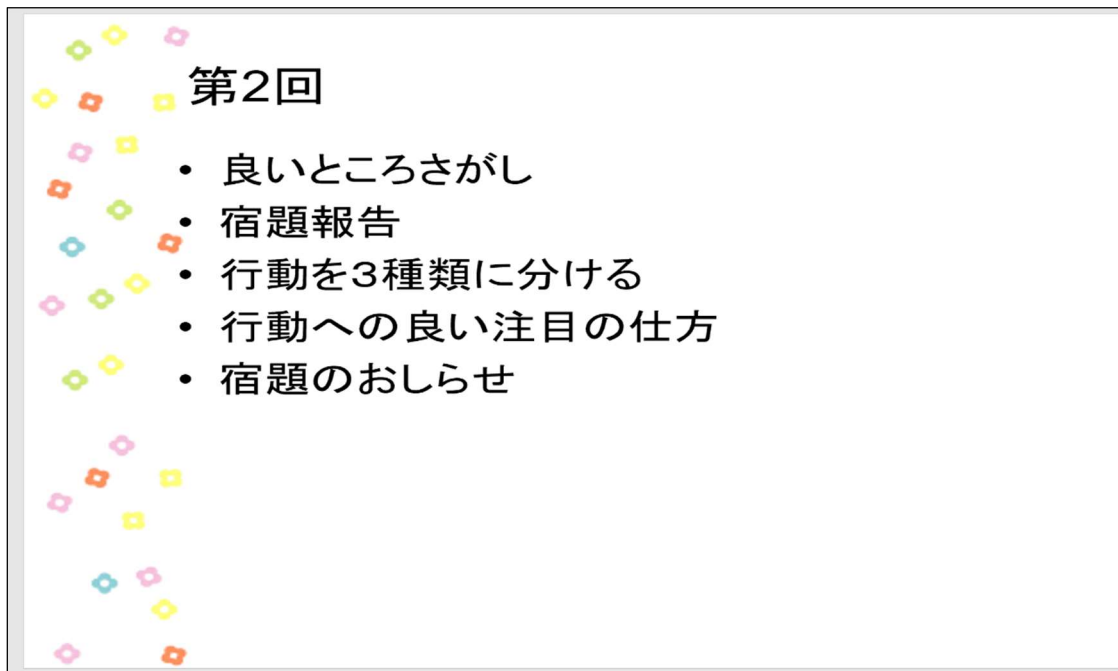
(図2) 各プログラムのチラシ



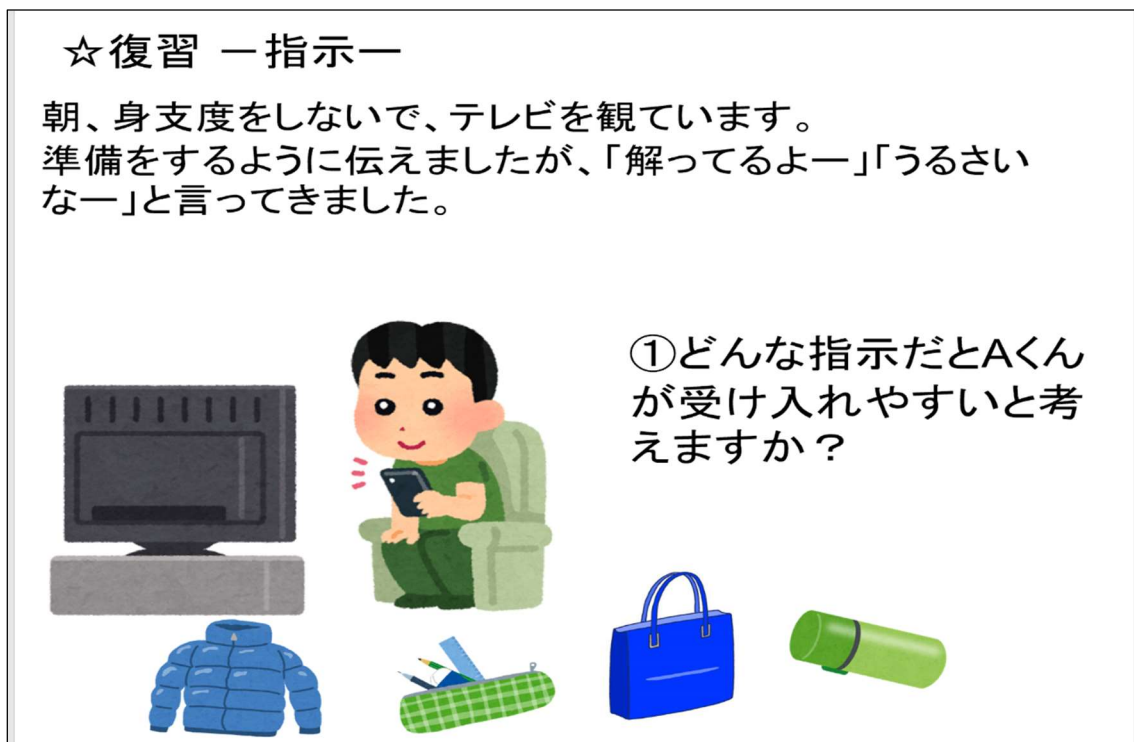
(図 3) ソーシャルスキル・トレーニングの様子 (導入)



(図 4) ソーシャルスキル・トレーニングの様子 (ビデオ教材を使った学習)

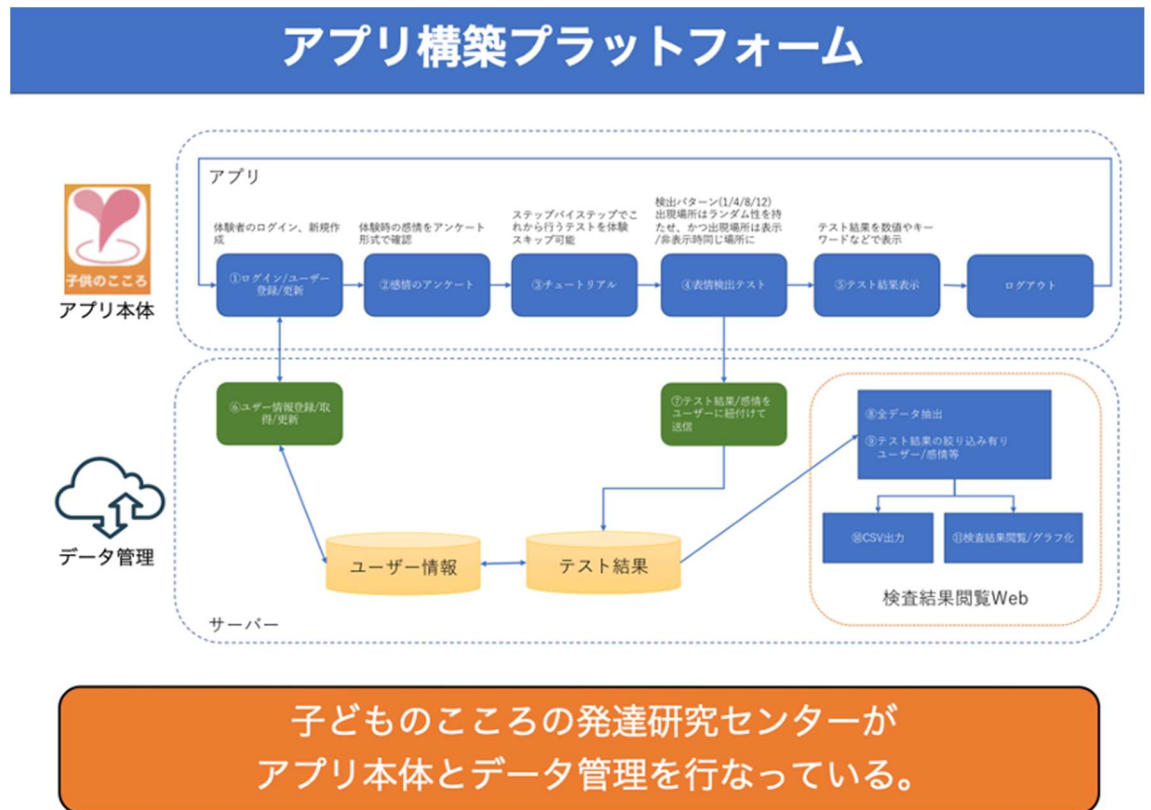


(図5) ペアレント・トレーニングの資料(スライド資料)



(図6) ペアレント・トレーニングの資料(従いやすい伝え方を考える練習資料)

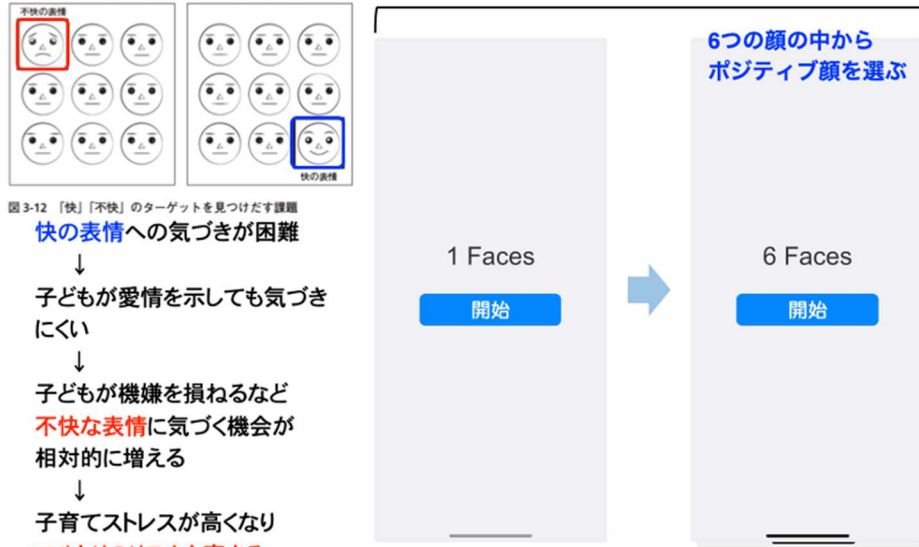
(図 7)



(図 8)

ポジティブ表情認知アプリ

表情認知課題



(図 9)

「快」表情を読み取る能力の介入後の変化

SST介入前後: 母親 12名 (40±3.4 歳)

